

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：15401

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K20865

研究課題名（和文）末梢性生体反応を用いたストレスマネジメント効果発現メカニズムの検証

研究課題名（英文）The mechanism of peripheral biological responses for stress management effects

研究代表者

服巻 豊（Haramaki, Yutaka）

広島大学・人間社会科学研究科（教）・教授

研究者番号：60372801

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、臨床動作法を用いたストレスマネジメント介入の前後における生理指標（だ液中アミノ酸）および心理指標（POMS2など）を測定し、その関連を検証することにより、効果発現メカニズムを明らかにすることを目的とした。研究1として集団を対象として Pre-Post Designによる介入研究を行い、研究2として事例研究を行った。その結果、集団研究及び事例研究のいずれにおいても心理指標においてネガティブ情動一般状態の有意な低下が認められた。しかし、だ液サンプル中の微量アミノ酸の測定では、集団と事例でアミノ酸変動に異なることが明らかになった。今後、さらなるデータの蓄積を必要とする。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究において集団介入と一事例介入の影響を検討した結果、心理指標の総合的ネガティブ情動は一貫して介入後に低下した。生理指標の検討では、集団介入におけるだ液中アミノ酸は、介入後に有意に上昇したが、一事例介入においては繰り返して介入後に一貫して低下した。心理指標は一貫してネガティブ情動を低下させたが、生理指標であるアミノ酸は集団介入では13種中7種が増加し、一事例介入では9種が低下した。ストレスマネジメント介入は一貫した心理指標への肯定的影響があり、同時に一貫性はないが生理指標の変動をもたらすことが明らかになり、ストレスマネジメント賦活系の存在が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to clarify the mechanism of the effect by measuring physiological indices (amino acids in body fluid) and psychological indices (e.g. POMS2) before and after a stress management intervention using the clinical dohso-hou, and by examining their associations. Study 1 was a pre-post design intervention study in a population, and Study 2 was a single-case experimental design. As a result, a significant decrease in the general state of negative emotions was observed in psychological indices in both the group study and the case study. However, the measurement of trace amino acids in body fluid samples revealed that amino acid fluctuations differed between the population and the case study. Further data accumulation is required in the future.

研究分野：臨床心理学

キーワード：ストレスマネジメント バイオマーカー だ液サンプル 臨床動作法 微量生体物質（アミノ酸） 心理指標 生理指標

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

従来のストレス研究は、自律神経のバランスを崩す事象や出来事をストレッサーとし、認知的評価を経て心理的、身体的反応を示すことをストレス反応として捉え、表出されたストレス反応を主観的自己評価やバイオマーカーで評価することであった。このような研究は、表出されたストレス反応を評価し、ストレス反応を軽減させるための対処として副交感神経を活性化し、交感神経が興奮しないようにストレス環境を調整するなど、ある意味、対症療法としての研究成果をあげてきた。しかし、現代ストレス社会においては、ストレスと上手に付き合う、ストレスをはねのける耐性を身につける時代とされ、健康教育の重要性が高まっている。近年、オキシトシンや GABA が注目され、経口摂取によるストレス軽減作用が明らかにされている。末梢性生体物質が脊髄内の GABA 放出を促し、求心性迷走神経を経て視床下部の調整を行っているという報告がなされた。このような背景にあって、ストレス研究は、従来のストレス反応賦活系と相反する作用を有し、ヒトが本来有しているストレス耐性を賦活する、つまり、ストレス耐性賦活系を見出す必要がある。ストレス反応賦活系とストレス耐性賦活系は、中枢から末梢へ、末梢から中枢へと経路が異なり、交感神経と副交感神経のバランスに大きな影響力を持つ生体内制御システムであると考えられる。ストレスに影響する交感神経、副交感神経は多くの生体内物質がかかわり、変動することが明らかにされている。こうした知見に基づくと、オキシトシン、GABA だけでなく、末梢性生体物質の作用によってストレス耐性賦活系を明らかにできるものと考えられる。

2. 研究の目的

Sun et al. (2018) は、オキシトシン投与が神経因性疼痛の疼痛軽減に効果があり、その作用は脊髄内の GABA 放出の影響であることを実証した。GABA は中枢神経における抑制性の神経伝達物質であり、抗不安作用を有し、ストレス緩和物質として注目されている。矢野田・佐々木・山本・太田 (2012) は、GABA 含有飲料水による摂取により、ストレス負荷試験での α -アミラーゼ量の有意な低下ならびに主観的なストレス評価の有意な低下を示し、GABA の経口摂取によるストレス軽減効果を明らかにした。Abdou et al. (2006) は、ヒトの GABA 摂取群がコントロール群と比べてリラックス効果ならびに不安軽減効果が有意であることを示した。また、ストレス状況下であっても GABA 摂取群は、プラセボ群と比較して IgA 活性化作用やストレス軽減効果が有意に高いことを明らかにした。オキシトシンは、末梢に受容体があり、副交感神経(迷走神経)を介して延髄孤束核に入力し、視床下部に作用し摂食行動を調整していることが明らかになっている (Iwasaki et al., 2014)。GABA は分子量が大きく、末梢から中枢への血液脳関門を通過しない。オキシトシン及び GABA のストレス軽減作用は、末梢作用によるストレス耐性作用として重要な機能を有していることを示唆している。以上のことより、生体内の末梢性のオキシトシン及び GABA が中枢神経を調整し、ストレス耐性を賦活する、いわゆる末梢から中枢を制御するストレス耐性賦活系の存在が示唆される。このことは、これまで生体内のストレス反応を引き起こすことで知られている視床下部-下垂体-副腎系 (HPA 系)、交感神経系や免疫系の抗ストレス作用としてのストレス反応活性化経路とはまったく異なる、新しいストレス制御システムの解明につながる。

臨床動作法は、具体的な動作課題を設定し、その動作遂行プロセスを通してクライアントの努力の仕方(体験の仕方)にアプローチする心理療法である。クライアントは、悩みや心理的問題に直面し、抱えて、対応に苦慮している。臨床動作法では、クライアントの悩みへの向き合い方(体験の仕方)は、動作にも表れており、動作課題遂行で見られる体験の仕方を主体的に変化させることで、新しい体験の仕方が促進されると考えられている。臨床動作法を用いて介入プログラムを実施した先行研究では、臨床動作法が状態不安の低下と気分状態の安定化をもたらす(服巻ら, 2018; 2019; 2020; 2021; 2022) こと、維持透析患者の疼痛軽減および疼痛マネジメントにも有効であることが示されている(服巻, 2011; 服巻・西, 2012; Haramaki et al., 2019)。以上のことより、臨床動作法による有意な疼痛軽減及び心理状態の安定化作用には、心理的效果だけでなく、生物学的・生理学的効果があることが予想される。臨床動作法による GABA を代表とする生体内微量物質の動態への影響について検証することは、疼痛緩和作用及び不安などのネガティブ感情の低減効果の生物学的エビデンスをもたらすものと考えられる。

本研究では、臨床動作法を用いたストレスマネジメント介入の前後における末梢性生体反応(生理指標)、ネガティブ感情(POMS2 など)及び自律神経活動との関連を検証することにより、ストレスマネジメント介入の効果発現メカニズムを明らかにする。このことにより、末梢性中枢制御機能としてのストレス耐性賦活経路の存在を明らかにする。研究目的を達成するために、研究 1 として集団研究(複数の集団を対象として Pre-Post Design による介入研究を行い、研究 2 として Single-Case Experimental Design (ABABABA Design) の事例研究を行う。末梢性生体反応の生理指標としてだ液中のサンプル採取を行い、ストレスマネジメントの心理的效果と同期する GABA をはじめとする生体内微量物質の動向を明らかにし、ストレスマネジメント介入前後のストレス耐性賦活系に関与するだ液中バイオマーカーの発見とストレス耐性賦活系モデルの解明を目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、3つの目的を達成することを目標とした。

臨床動作法あるいは臨床動作法を用いたストレスマネジメント介入による影響として

目的1) 心理指標の変化を明らかにする

目的2) だ液サンプル中の生体物質の変化を明らかにする

目的3) 心理指標と生体物質の関連性を明らかにし、

ストレス耐性賦活系に關与するだ液サンプル中生体微量物質を明らかにする

ストレス耐性賦活系の存在を明らかにし、モデルを解明し、構築する

研究1) 臨床動作法を用いたストレスマネジメントの集団介入研究

A 大学学生(3年生222名,4年生230名)を対象として臨床動作法を用いたストレスマネジメント介入プログラムを実施し,本研究の主旨説明に同意が得られた275名に心理尺度を測定し,うち55名はだ液採取の同意を得て研究対象者とした。心理尺度測定及びだ液採取;臨床動作法を用いたストレスマネジメント介入の直前,直後および介入3か月後に,POMS2短縮版(35項目),MAIA(32項目),The Japanese Short Form Version of the State Self-Compassion Scale(SSSC-J;6項目) Japanese version of the State Self-Compassion Scale(SSCS-J;18項目)および2項目自尊感情尺度(Two-Item Self-Esteem scale:TISE)の計4尺度をGoogle Formにて実施し,専用のだ液用チューブにて対象者自身で採取し,提出を求めた。アスパラギン酸,グルタミン酸,アスパラギン,セリン,グルタミン,ヒスチジン,グリシン,トレオニン,アルギニン,タウリン,アラニン,GABA,チロシン,総計13種類を測定した。

倫理的配慮:本研究計画及び同意説明文書は,福岡大学倫理審査委員会の承認を受けた。

研究2) 臨床動作法を用いた Single-Case Experimental Design による介入研究

52歳,男性1名を a single-case experimental design による対象者とし,動作法を用いたストレスマネジメント介入を実施した。ベースライン(非介入日),介入日(介入直前・直後:Pre-Post),ベースライン(非介入日)と交互のABABAデザインを採用し,2か月後にフォローアップ(FU)を行った。心理指標は,POMS2とMAIAを採用し,だ液サンプル測定項目は,研究1と同様に13種のアミノ酸(生体微量物質)を選定した。結果は,visual analysis を用いた効果検証を行った。

4. 研究成果

研究1の成果:臨床動作法を用いたストレスマネジメント介入後においてPOMS2のTMDは実施前より有意に低下($p<.000$)し,活気は有意に増加($p<.000$)した(図1)。SSSC-J及び自尊感情尺度は,ストレスマネジメント介入後において介入前より有意に増加($p<.000$ 及び $p<.000$)した(図2&3)。臨床動作法体験は,大学生のネガティブ感情を低減し,活気,状態セルフコンパッション得点及び自尊感情得点を増加させることを明らかにした。また,だ液採取に同意した55名のだ液中アミノ酸の測定値は,臨床動作法体験後においてアスパラギン($p=.037$),セリン($p=.008$),グルタミン($p=.011$),ヒスチジン($p=.001$),アルギニン($p=.000$),タウリン($p=.000$),チロシン($p=.027$)において体験前より有意に増加した(表1)。アスパラギン,セリン,ヒスチジンは,中枢神経保護作用を有しており,アルギニン,タウリン,グルタミンは疲労回復・持久力向上を有するアミノ酸である。臨床動作法を用いたストレスマネジメント介入はネガティブ情動状態全般を有意に低下させ,ポジティブ感情及び自己を大切に感情を増加させるという心理的働きと同時に,脳神経保護作用,疲労回復・持久力向上作用を有するアミノ酸を増加させていた。以上のことは,臨床動作法による心理的影響とともに生理的影響が相互あるいは相補的に心理療法的効果をもたらしていることが示唆され,心理指標と生理指標との関連についての検証はさらなる課題である。

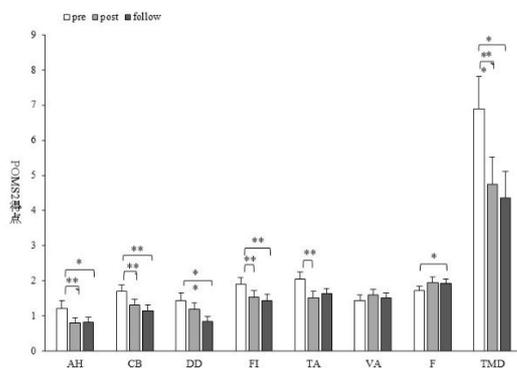


図1. 臨床動作法を用いたストレスマネジメント介入前後,フォローアップにおけるPOMS2の各因子平均得点の変化(n=55)

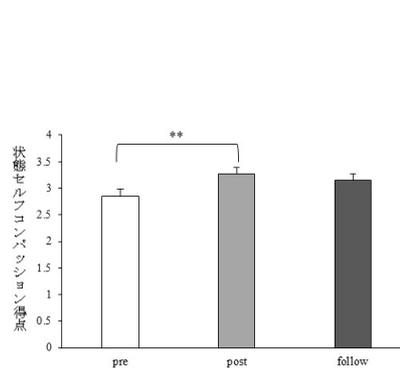


図2. 臨床動作法を用いたストレスマネジメント介入前後,フォローアップにおける状態セルフコンパッション平均得点の変化(n=55)

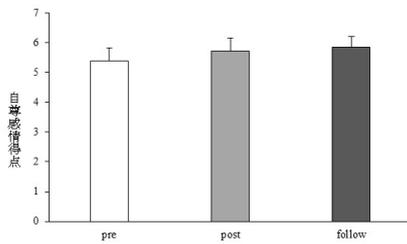


図3．臨床動作法を用いたストレスマネジメント介入前後，フォローアップにおける2項目自尊感情平均得点の変化（n=55）

表1．臨床動作法を用いたストレスマネジメント介入前後におけるだ液サンプル内13種アミノ酸測定値の比較結果

水準の組	差	標準誤差	95%下限	95%上限	t値	df	p値
uM_pre_アスパラギン酸 - uM_post_アスパラギン酸	-3.585	2.809	-9.218	2.047	-1.276	54	.207
uM_pre_グルタミン酸 - uM_post_グルタミン酸	-4.065	6.131	-16.358	8.227	-0.663	54	.510
uM_pre_アスパラギン - uM_post_アスパラギン	-0.282	0.132	-0.545	-0.018	-2.142	54	.037
uM_pre_セリン - uM_post_セリン	-16.358	5.934	-28.255	-4.462	-2.757	54	.008
uM_pre_グルタミン - uM_post_グルタミン	-18.573	7.050	-32.706	-4.439	-2.635	54	.011
uM_pre_ヒスチジン - uM_post_ヒスチジン	-13.331	3.772	-20.893	-5.768	-3.534	54	.001
uM_pre_グリシン - uM_post_グリシン	-18.045	14.637	-47.391	11.300	-1.233	54	.223
uM_pre_トレオニン - uM_post_トレオニン	-1.106	2.489	-6.097	3.885	-0.444	54	.659
uM_pre_アルギニン - uM_post_アルギニン	-28.637	6.037	-40.741	-16.532	-4.743	54	.000
uM_pre_タウリン - uM_post_タウリン	-29.365	7.087	-43.574	-15.156	-4.143	54	.000
uM_pre_アラニン - uM_post_アラニン	-17.055	8.722	-34.541	0.432	-1.955	54	.056
uM_pre_GABA - uM_post_GABA	-0.243	0.182	-0.608	0.122	-1.334	54	.188
uM_pre_チロシン - uM_post_チロシン	-9.762	4.284	-18.351	-1.173	-2.279	54	.027

研究2の成果：ABABABA DesignによるPOMS2における総合的気分状態（Total Mood Disturbance: TMD）は視覚的に検討する（visual analysis）とPre-Postで減少し、ベースライン（非介入日）は減少したPostの値が維持された。これらの結果は、我々のこれまでのストレスマネジメント介入の効果検証結果と一致していた。しかし、フォローアップ木では研究期間を通して最も高い値となっていた。POMS2におけるTMDはネガティブな情動状態全般の推定値として信頼性が高く、臨床動作法を用いたストレスマネジメント介入直後に有意に低下し、フォローアップ時にもその効果が持続していた（図4）。

だ液サンプル中の13種アミノ酸の測定では、グルタミン酸、セリン、グリシン、アルギニン、アラニン、チロシンが臨床動作法を用いたストレスマネジメント介入前後で値が減少していた。研究1の集団研究結果では、だ液サンプル中の7種のアミノ酸は介入後に有意に増加したのに対し、研究2のSingle-Caseでは視覚的に9種のアミノ酸が介入直後に減少していた。本Single-Case結果においては、心理指標は研究1の集団研究と同様に総合的気分状態が介入により低下したが、ベースライン（BL：非介入日）においてあまり変化が見られなかった。

本研究結果より、臨床動作法を用いたストレスマネジメント介入によってネガティブ情動状態全般が低下し、それと同期してだ液サンプル中の9種のアミノ酸が変動（低下）したことは、心理状態と生理指標とが同期している可能性を示唆したものと考えられる。研究1の結果との相違はあるが、心理指標と生理指標との関連についてはより詳細の検討が必要である。

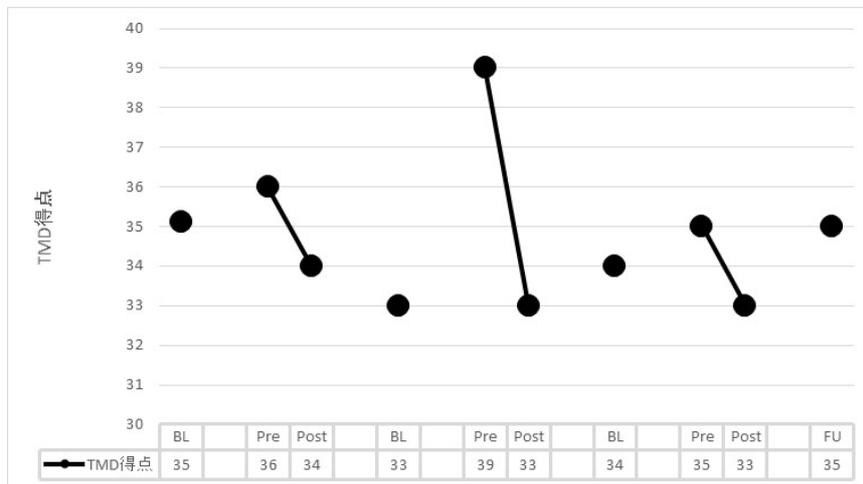


図 4 . ABABABA Design における POMS2 の TMD 得点の推移 (Visual Analysis)

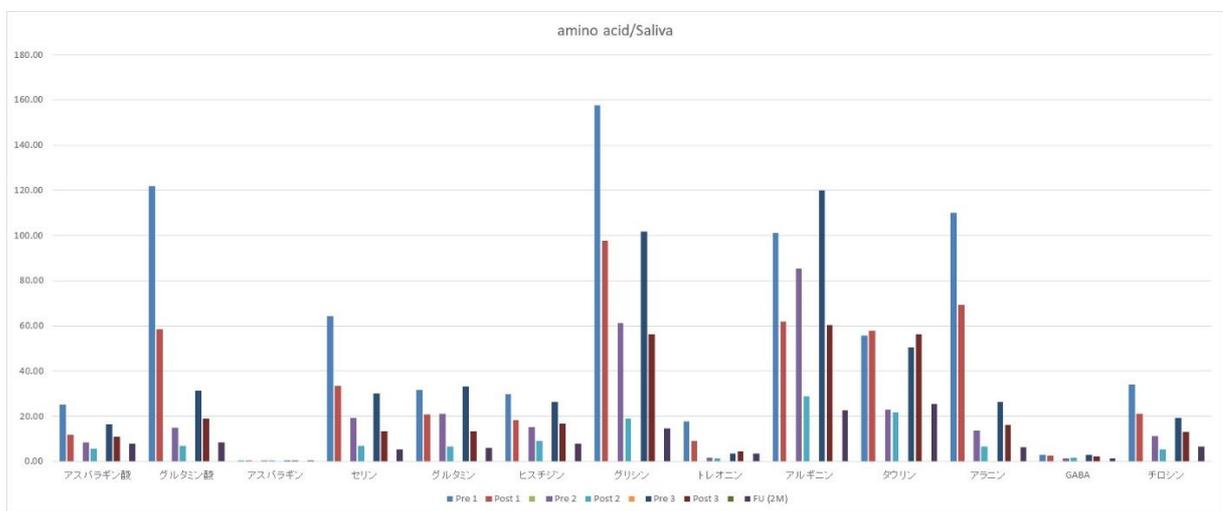


図 5 . ABABABA Design におけるだ液サンプル中の 13 種アミノ酸の推移 (Visual Analysis)

本研究の目的・目標としてきたストレス耐性賦活系に関連するだ液サンプル中の微量アミノ酸の検出には一貫したデータが得られなかった。しかし、ストレスマネジメントの効果として得られる心理指標と同期しただ液サンプル中の微量アミノ酸の存在は示唆された。研究 1 の集団研究の対象者は、大学生であり、Single-Case の対象者は中年男性であった。発達段階、年齢、性別などを考慮した研究デザインを用いたより詳細なデータを蓄積することで、だ液サンプル中におけるストレス耐性賦活系のバイオマーカーの発見ならびに新しいストレス耐性賦活系モデルの構築が目指せるものと考えられる。

本研究は萌芽的取り組みであったが、今後は大型のプロジェクトに発展させ、ストレス耐性力のバイオマーカー及び客観的評価の作成を目指す。また、心理状態とバイオマーカーの変化と運動性を明らかにすることで、精神的疲労から休職を余儀なくされている人々の復職プログラムへの参加タイミングや復職環境の適応度の客観的評価ができる可能性にチャレンジしていきたい。本研究によって新しいストレス研究の道を開き、ストレス社会を生き抜く力の涵養に貢献でき、国民のこころの健康に寄与することを目指す。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 10件）

1. 著者名 Fujikawa Takuya, Kabir Russell Sarwar, Haramaki Yutaka	4. 巻 13
2. 論文標題 Experimental Manipulation of Guided Attention to the Shoulder Movement Task in Clinical Dohsa-hou Induces Shifts in the Reactive Mode and Indicates Flexible Cognitive Control Performance	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fpsyg.2022.785385	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 服巻豊・中尾敬・船橋篤彦・安部主晃・神原利宗・Russell Sarwar Kabir	4. 巻 19
2. 論文標題 自己治癒活動を賦活するストレスマネジメント教育プログラムの効果検証と実装化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 広島大学教育学部共同研究プロジェクト報告書	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Kabir Russell Sarwar, Haramaki Yutaka, Kuwayama Hisashi, Walter Brett Raymond, Kawashima Tinka Delakorda	4. 巻 20巻
2. 論文標題 Social Engagement Forums to Strengthen Intercultural Ties: Piloting Community Outreach Workshops for Needs Assessment of Educational Support Services among Ethnic Minorities in Higashi-Hiroshima, Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 広島大学教育学部共同研究プロジェクト報告書	6. 最初と最後の頁 33-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 神原利宗・服巻豊・森田愛子・梅村比丘・進矢正宏・柳本大地	4. 巻 20
2. 論文標題 言語と意味の連合に関する調査・実験研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 広島大学教育学部共同研究プロジェクト報告書	6. 最初と最後の頁 21-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 神原利宗・服巻 豊・進矢 正宏・柳本大地	4. 巻 21
2. 論文標題 言語と意味の連合に関する実験研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 広島大学教育学部共同研究プロジェクト報告書	6. 最初と最後の頁 19-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 服巻豊・右田啓介・今任拓也・白石恵子・三重美香・中尾敬・船橋篤彦・安部主晃・神原利宗・Kabir Russell Sarwar	4. 巻 21
2. 論文標題 看護師への動作やイメージを用いたストレスマネジメント教育プログラムの影響に関する研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 広島大学教育学部共同研究プロジェクト報告書	6. 最初と最後の頁 9-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 HIRATA Yutaro, HARAMAKI Yutaka, TAKANO Yasuyo, NISHIYORI Kazuhiko, OTSUKA Rie, NAKAMURA Sae	4. 巻 2022
2. 論文標題 Development and Evaluation of a Mutual Support Program for Parents of Children with Developmental Disorders in Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Advances in Public Health, Community and Tropical Medicine	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.37722/APHCTM.2022302	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kazlauskas E., Jovarauskaite L., Abe K., Brewin C. R., Cloitre M., Daniunaite I., Haramaki Y., Hihara S., Kairyte A., Kamite Y., Sugimura K., Thoresen S., Zelviene P., Truskauskaitė-Kuneviciene I.	4. 巻 31
2. 論文標題 Trauma exposure and factors associated with ICD-11 PTSD and complex PTSD in adolescence: a cross-cultural study in Japan and Lithuania	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Epidemiology and Psychiatric Sciences	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1017/S2045796022000336	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 IMATOH TAKUYA、MATSUMOTO TAICHI、HARAMAKI YUTAKA、MIGITA KEISUKE	4. 巻 43
2. 論文標題 Impact of Concomitant Use of Azoles on Bortezomib-related Adverse Drug Reactions Using JADER	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Anticancer Research	6. 最初と最後の頁 1341-1349
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.21873/anticanres.16282	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 服巻豊・右田啓介・今任拓也・中尾敬・船橋篤彦・安部主晃・Russell Sarwar Kabir・藤川卓也	4. 巻 22
2. 論文標題 ストレスマネジメント教育プログラムにおける効果指標となるバイオマーカーの探索	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 広島大学教育学部共同研究プロジェクト報告書	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 藤川卓也・川俣優・御藤有貴・堀之内滉・服巻豊
2. 発表標題 心理劇が気分及ぼす影響の検討 オンライン実施と対面実施を比較して
3. 学会等名 日本臨床心理劇学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Takuya Fujikawa, Russell Sarwar Kabir, Yu Kawamata, Chisato Takahashi, Yutaka Haramaki
2. 発表標題 Differences in proactive control upon executing body movements with and without guided attention.
3. 学会等名 The 32nd International Congress of Psychology PRAGUE 2020+ (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yu Kawamata, Chisato Takahashi, Takuya Fujikawa, Yutaka Haramaki
2. 発表標題 Comparing mood state change from Dohsa-hou with Lactic acid bacteria use as a health behavior.
3. 学会等名 The 32nd International Congress of Psychology PRAGUE 2020 + (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Russell Kabir, Shushi Namba, Yutaka Haramaki
2. 発表標題 Concurrent US-Japan findings on interoceptive attention tendencies and perceived health competence.
3. 学会等名 The 32nd International Congress of Psychology PRAGUE 2020 + (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 服巻豊・高橋知里
2. 発表標題 Zoom心理劇の試み 緊急事態宣言を乗り切るために
3. 学会等名 日本臨床心理劇学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Fujikawa, T., Kawamata, Y., Kabir, R. S., Funabashi, A., & Haramaki, Y
2. 発表標題 Internet-delivered psychotherapy intervention using Dohsa-hou increases self-regulatory attention to the body relative to other interoceptive tendencies
3. 学会等名 2023 European Psychology Conference, 3-6 July 2023, Brighton, UK. (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yu Kawamata, Yutaka Haramaki, and Takuya Fujikawa
2. 発表標題 Effects of Dohsa-hou on awareness of internal experience: From the single data
3. 学会等名 2023 European Psychology Conference, 3-6 July 2023, Brighton, UK. (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yutaka Haramaki, Keiko Shiraishi, Mika Mie, Kiyoka Aratake, Natsumi Murakami, Yu Kawamata, Takuya Fujikawa, Atsuhiko Funabashi and Russell Sarwar Kabir
2. 発表標題 Examining the effectiveness of a Dohsa-hou stress management Intervention for nurses who faced the Covid-19 pandemic
3. 学会等名 2023 European Psychology Conference, 3-6 July 2023, Brighton, UK. (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 船橋篤彦・上手幸治・服巻豊・藤川卓也・川俣優
2. 発表標題 「アフターコロナ」時代の宿泊型キャンプの在り方とトレーナー養成に関する考察 - 3泊4日の宿泊型キャンプ実施を踏まえて -
3. 学会等名 日本リハビリテーション心理学会兵庫大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 荒武聖香・藤川卓也・村上菜津美・服巻豊
2. 発表標題 大学院生における継続的な心理劇体験の効果の検討
3. 学会等名 日本臨床心理劇学会第49回福岡大会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 服巻 豊	4. 発行年 2021年
2. 出版社 広島大学出版会	5. 総ページ数 287
3. 書名 維持透析患者のこころとからだ 内なる自己治癒活動をつむいでいく	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	黒山 竜太 (Kuroyama Ryuta) (30533468)	熊本大学・大学院教育学研究科・准教授 (17401)	
研究分担者	船橋 篤彦 (Funabashi Atsuhiko) (40432281)	広島大学・人間社会科学研究科(教)・講師 (15401)	
研究分担者	K A B I R R U S S E L L S A R W A R (Kabir Russell Sarwar) (00881260)	広島大学・人間社会科学研究科(教)・助教 (15401)	
研究分担者	右田 啓介 (Migita Keisuke) (10352262)	福岡大学・薬学部・教授 (37111)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------